

イザヤ書1章10－18節

テサロニケの信徒への手紙2章1－4、11－12節

ルカによる福音書19章1－10節

昨日は11月1日諸聖徒日でした。午後、谷中霊園にて教区墓地礼拝に参加してきました。明日は、10時半より小平霊園での墓地礼拝に出席いたします。聖書日課は、祈祷書試用版の特定26ですが、本日の特祷は、「聖徒たち」という言葉が何度も登場いたします。諸聖徒日の趣旨に合わせてのことと思います。この時期は、歴史上の聖徒たちや教会の信仰の先輩たちを覚える礼拝を持ちますが、聖書日課の旧約日課、福音書ともに、悔い改めること、主なる神様に立ち返ることがテーマです。

本日の旧約日課イザヤ書は、11節に「**主は言われる。あなたがたのいけにえが多くても、それが私にとって何なのか。私は、雄羊の焼き尽くすいけにえと、肥えた家畜の脂肪に飽きた。私は、雄牛や小羊や雄山羊の血を喜ばない**」とある通り、神殿祭儀に対する批判が書かれています。主なる神様が行うことを命じた神殿祭儀、それを神様が喜ばない、これはおかしい話です。理由は、その時代の行為が、形だけになっていたからです。

神殿祭儀とは何か、その答えはいろいろですが、その一つに、神様に対する感謝や、反省、願いを捧げることにあります。もう一つは、その行為を人々にわかるようにする、公にすることです。『聖書（旧約）』において、信仰を主なる神様にも人々にも、公にすることは重要なのです。しかし、この公にするという要素が、形だけ神様を信じている、ということを招いてしまう場合があります。つまり、信仰の公の表明としての神殿祭儀が、神様の方を向いていない不信仰をごまかすために、機能してしまう場合があるのです。これは、単純に神様を信じないというあり方とは異なります。本質は不信仰なのですが、神殿祭儀が繰り返される限り、形の上では信仰的であるからです。

主なる神様は、預言者イザヤを通して、イスラエルの人々のそのような信仰のあり方を、厳しく批判しました。本日の個所に「立ち返る」という文言はありませんが、「**洗え。身を清くせよ。あなたがたの悪い行いを私の目の前から取り除け。悪を行うことをやめよ。善を行うことを学べ。公正を追い求め、虐げられた者を救い、孤児のために裁き、寡婦を弁護せよ**」（イザヤ 1:16-17）と、主なる神様に立ち返り、その喜ばれることを行えと命じているのです。

このイザヤの神殿批判は、イエス様の神殿に対する批判と類似するところがありますが、少し異なっています。イエス様も、祈りの家ではなく、強盗の巣となってしまった神殿に対して強い批判をしましたが、イエス様は、国という枠組みを超えて、神様が創られた人間という存在そのものが、神様に対してどのように向き合うかということを題材としました。それは、先週の福音書の譬えに描かれていたように、自分は徴税人ではないことを感謝し、倫理的に正しいことを行い、律法を守っていることを誇り、そして神殿祭儀もしっかりと行っているような人をも、イエス様は批判しているからです。そのような思い上がった信仰のあり方は、イザヤの批判とは異なるにしても、神に対しても、人に対し

ても、間違っているからです。

さて、福音書は、その徴税人ザアカイのお話です。先週触れました通り、ローマ帝国支配下での税金の徴収は、それだけでも憎まれる存在ですが、ユダヤ人であるザアカイは、異邦人と触れ合うということから、同胞のユダヤ人からも、律法に基づき宗教的にも汚れているとして嫌われました。しかし、どんなに嫌われたとしても、誰かがその仕事をしなければなりません。彼のような存在がいなければ、ローマ帝国とローマの望む平和的關係は維持できません。しかし、彼が徴税を通して維持していた關係は、神と人との、そして人と人との關係としては、正しいものではありませんでした。それは、預言者イザヤが批判している通り、弱くされた人々を虐げる行為であったからです。ザアカイが、イエス様を一目でも見たいと思った理由は書かれていませんが、そのような關係から脱却することを願ったことなのでしょう。それは単に仕事を辞めたいということではなく、自分が主なる神様に対しても、人に対しても、本来あるべき姿に戻りたいという願いなのでしょう。

ザアカイのお話は、悔い改めた人間としての姿として有名です。しかし、それは、単に罪ある状態から神様を信じるようになったことを、素晴らしいこととしているわけではありません。ザアカイの物語は、神と人と、そして人と人との回復の物語に他なりません。なぜならば、ザアカイのお話は、終わり、結末が書かれていないからです。

ザアカイは、「主よ、私は財産の半分を貧しい人々に施します。また、誰からでも、だまし取った物は、それを四倍にして返します」(ルカ 19:8)と誓います。イエス様もその言葉を受けて、「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」(ルカ 19:9-10)と語ります。しかし、お話しには、終わりが記されていません。彼がイエス様に誓った言葉通りに実行したか否かは、分からないのです。そして、冷静に考えれば、四倍にして返すのはよいのですが、もし彼がだまし取った人が数多くおり、その額が膨大であったならば、それが財源的に可能かどうかは疑問なのです。ザアカイが真剣にその返還に努めようとしても、不可能な場合もあるからです。しかし、もしザアカイを軽蔑していた周囲の人々が、彼をアブラハムの子として受け入れようとして、寛容さと赦しの心を持てば異なります。たとえ、彼は四倍返しを実施できなかったとしても、不法に取り立てた分を、逆に借金と考えるならば、それがいつかの日か、許されることが律法にあるからです。ザアカイが立ち返ることを実行するには、彼一人の努力だけではなく、周囲の人々の力も必要なのです。それが主なる神様の示す、神と人、人と人との關係です。

今月は、いつもより少し遅れて、今年のパザーを持ちます。パザーですから、そこに金銭が介在し、献金先という目的とそれに応じた目標もあります。しかし、教会がパザーで示すべき事柄は、イエス様が示した、主なる神様と人との關係、そして人と人との關係です。その關係を作り上げるのは、わたしたちが毎週捧げている礼拝と祈りです。よりよいパザーとなるために、パザー自体の準備を進めると同時に、よい一層、礼拝と祈りに励みたいと思います。そして、イエス様が示された交わりから、世界に平和が広がるように努めたいと思います。